



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第25主日 C年 (2022年9月18日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：アモス書 8章4—7節

第二朗読：テモテへの手紙一 2章1—8節

福音朗読：ルカによる福音書 16章1—13節

この世の賢さを使う

第一朗読の5節にある。「^{しんげつさい}新月祭はいつ終わるのか…^{あんそくび}安息日はいつ終わるのか」を心に留めてください。アモスの^{よげん}預言の当時、北王国イスラエルは、非常な繁栄のさなかにありました。しかし、その時代は同時に、^{かくさ}格差がひろがり、^と富むものがますます富み、^{まず}貧しいものがいよいよ貧しくせられる社会を生み出しました。

商人たちにとって安息日は、^{めいわく}迷惑な日です。店を開くことができないからです。だから、安息日が早く^{すぎ}過ぎてほしい。商人たちの^{おも}想いは^{かねもう}金儲けだけです。そして^{むぎ}麦を売りに出すために、^{ます}エファ升を小さくし、^{ふんどう}分銅を大きくし、^{いつわ}偽りの^{てんびん}天秤でだまして、^{くつ}弱く^び貧しい者を靴一足の^び微々たるお金で買い取ろうとしています。

安息日は、天地創造の神のわざを思い起こし、さらには神さまがエジプトの地から^{みちび}導いてくださったという出エジプトの出来事を思い起こすために仕事を休むのです。こうして週の^{のこ}残りの日々を神さまと^{いっしょ}一緒に^{はたら}働くことができるようになります。しかし、安息日をないがしろにすると、^{ゆうわく}利益の^{ゆうわく}誘惑に負け、神さまを中心ではなく、^お利益を中心生きるようになります。

第二朗読は『テモテへの手紙一』ですが、4節から6節にかけて^{もくそう}黙想しましょう。4節には「神はすべての人々が救われて^{すく}真理を知るようになることを」とあります。神さまは^{じんしゆ}人種や^く民族の区別を超えて、すべての人の救いを^{のぞ}望んでおられることがここに^{しる}記されています。少し難しい表現では「^{ふへんでききゆうざい}神の普遍的救済意志」といえるでしょう。

しかし、続く5から6節には「神は^{ゆいいつ}唯一であり、神と人との間の^{ちゆうかいしや}仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです」と記されています。

前節で神さまの普遍的な救済のご意志が示されながらも、今度は、救い主イエス・キリストによる救いが語られています。神さまはすべての人の救いを望みながらも、その救いはキリストを通しての救いなのです。つまり、キリストによる特殊的な、あるいは個別的な救いなのです。この5-6節は、キリスト教の信仰の基本的な教えを表しています。初代教会ではこの節の言葉を使って、洗礼の時の信仰宣言としていたと考えられます。

今日の福音朗読は二つの部分から成り立ちます。不正な管理人のたとえ話(1-9節)、イエスさまの言葉による解説と勧め(10-13節)です。不正な管理人のたとえ話は難解です。ここでは、朗読の後半のイエスさまの言葉に注目します。

13節のイエスさまの言葉は心に留めて、記憶してください。「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」。

イエスさまのまとめの言葉です。不正な管理人の「管理人」はギリシア語でオイコノモスと言います。これは「召し使い」を表すオイケテースと関連する単語です。どちらのギリシア語も家を表すオイコスに由来します。わたしたちが自分の家で日常生活を送るのと同じように、不正な管理人は彼なりに日常生活を誠実に生きた人なのかもしれません。

「仕える」は奴隷を表すドウロスに由来する単語です。当時の奴隷は自分の主人を崇め、尊敬しました。ですから「主人に仕える」とは主人を愛し、主人に親しみ、心から尊敬を持って従うことです。そんな時、召し使いに喜びがやってきます。

金銭や富、あるいは地位といったものはこの世で大きな力を持っています。しかし、それは神さまと対立できるほどのものではありません。富はあくまでもこの世のものにすぎないのです。神さまはこの世を超えていますから、富すらも神さまから与えられた恵みなのです。もし、人が神さまを見失ったら、人は富の持つ強大な力に心奪われてしまうでしょう。そして、富に仕えるようになり、富とともに滅びゆくのです。

「ごく小さな事」、「不正にまみれた富」、「他人のもの」といったこの世にある事柄には忠実であることは勧められますが、その忠実さの中心に神さまに仕え、永遠の住まいに迎えられることが一番大切なのだとすることが大切だと今日の福音朗読は伝えるのです。

説教：この世の賢さを使う

今日の福音は富は必要ないと言っているわけではないと思います。しかし、富に隷属すると、富に足をすくわれます。お金とか財産とか名誉といった実体のないものにわたしたちの生活はもっていかれるのです(もちろんお金も財産も大切なものです)。神さまに隷属すると(今日の福音の最後にある「仕える」は、もともとは奴隷となるという意味です)、わたしたちの生活は少し形を変えるかもしれません。神さまに隷属して、神さまだけに従って生きていくために、不正な管理人のようなずる賢さ、タフさは必要なのではないのでしょうか？